



ナレーター 古館寛治
ささきのぞみ

出演 加藤 忍 Anna Mitzel

声の出演 武 虎 高橋大輔
北沢 力 康長佑香
山川琴美

企画・製作 エグゼクティブプロデューサー 河村光庸

プロデューサー 杉田浩光

長井 龍 内山雄人

音楽 三浦良明

撮影 笠井知彰
高橋秀典
笹目康一

照明 高橋 勇
佐久間敏美

VE 田代 健

美術 平原道夫
衣装 岡崎貴子
スタイリスト 石原徳子
メイク 馬場景子
結城春香

スチール(動画) 神谷智次郎
スチールアシスタント 和田大樹
人形制作 葛谷朱美
壺振り指導 岡部まき
フォードコーディネーター 鈴木理繪
車輛 大山タクシー
制作デスク 吉井江那

ディレクター 鶴下 满
リサーチ 上野閑一郎 吉本珠代
「博打打ち伝説」原案 プチ鹿島(文藝春秋digital)
アニメ脚本協力 矢野了平

音響効果 大塚智子
編集 沼田葉子
ミキサー 青木雅春
選曲 四元裕二
編集助手 北島沙耶
ミキサー助手 石森裕美子
DCPマスタリング 長崎隼人

アニメーション べんびねこ
アニメーション製作 Coyote

宣伝統括 石山成人
宣伝プロデューサー 長友清顕
宣伝 ポイント・セット
グラフィックデザイナー 三堀大介(サイレン)
予告編 越前屋一幾(ノマド)
公式サイト 清野賢司
海外セールス 森 千代 作美はるか 脳所美紀
配給統括 林 春樹
劇場営業 櫻井 刚 山田駿平
インシアター 山田みかる

法務 四宮隆史
秋山 光(E & R総合法律会計事務所)

取材協力 白井 聰
田崎 基 polipoli・伊藤和真

撮影協力 NPO法人TENOHASHI・清野賢司
あすわか事務局
柳澤協二 西谷文和
赤旗政賢 カジノ誘致反対横浜連絡会
しんぶん赤旗

資料協力 『官邸の暴走』古賀茂明

撮影協力 横川圭希 フルスコア
東宝ステラ日映アーカイブ

資料提供 朝日新聞社 毎日新聞社 読売新聞社
日本経済新聞社 神奈川新聞社
日刊スポーツ新聞社
共同通信イメージズ 時事通信フォト

Special Thanks 岸元美江 本庄 葉 鬼頭 明
福田亮平 内山華鈴

AWABEES IMAGICA Lab. Bart.lab
PHONONSORE

企画協力 古賀茂明

「パンケーキを毒見する」フィルムパートナーズ
スター・サンズ 李 詠 宇津木佐代子 行実 良
椿 宣和 鈴木さとる 岡本圭三
富田朋子 渡辺 誠

配給協力 KADOKAWA

配給 STAR-SUNS

制作プロダクション テレビマンユニオン

監督・構成・編集 内山雄人

©2021「パンケーキを毒見する」フィルムパートナーズ

パンケーキを毒見する

2021年 / 日本映画 / 104分 / カラー / ビスタ / ステレオ
制作:テレビマンユニオン 記録:スター・サンズ 記録協力:KADOKAWA ©2021「パンケーキを毒見する」製作委員会

発行日:2021年7月30日 発行:スター・サンズ 撮集:KICCORIT
デザイン:三堀大介 木村真也(SIREN Inc.) テキスト協力:佐藤結 印刷所:三永印刷 定価:800円(税込)
※本プログラム掲載の記事・写真等について無断での複数転載(インターネット含む)を禁じます。



コトバ
言葉…それは人間だけが持ち得る“チカラ”です。

しかし、“彼ら”は人間が人間たる所以の“言葉”をなりふり構わず放棄し、人間の尊厳を否定する“イキモノ”になり果てたのです。

2021年の初頭から始まった150日間の国会で“言葉”をまやかしとなしくずしの道具としてフル活用し、やがて終盤は“言葉”を遠ざけ、切り捨て無力化し、民主主義をも否定する恥すべき“奇行”に出てきたのは、既に皆さんご存じの通りです。

150日間は、皮肉にもこの映画の製作期間でした。『パンケーキを毒見する』は、現役政権のトップを題材とした日本映画史上はじめての作品となりましたが、この150日の間に「スカスカ政権を明らかにする」という当初のコンセプトが吹き飛んでしまった事は想定外で、今やさらに悪い「ズタズタ政権」といってもよいでしょう。

しかし、多くのメディア、ジャーナリズムが嫌う「選挙に影響を与える時期」、東京五輪真っ只中の7月30日公開こそ、この映画の真骨頂ではないでしょうか。選挙前のこの時期にあえてこの映画をぶつけ、「選挙に影響を与えるべき映画」になったなら、この暗黒時代にまずは改めて、「メディアとは？ジャーナリズムとは？そして映画とは？」の“言葉”が飛び交う事を深く願うものです。

現政権の発足時とほぼ同時に製作を決めていた、あまねく困難をきわめた本作に臨むにあたって、

①タイトル名『パンケーキを毒見する』

②公開時期“開催の有無に関わらず五輪真っ只中の7月30日”

③わかりやすい政治ドキュメンタリー

という私の無理難題のオーダーに応えてくれた内山雄人監督、杉田浩光プロデューサー、スタッフ、そして出演者、全ての皆様の矜持と勇気に深く頭を下げさせて頂きます。

『新聞記者』の制作チームが、菅義偉首相の素顔に迫る

世界が未曾有のコロナ禍に直面する中、国民の命と激動の時代の舵取りは、この男に託された。日本アカデミー賞で作品賞に輝いた『新聞記者』や、東京国際映画祭スプラッシュ部門の作品賞に選ばれた『i-新聞記者ドキュメント-』といった作品を通して、官邸政治の闇や菅義偉首相(当時官房長官)をウォッチし続けてきた映画会社スターサンズが、満を持して作り上げた“今、一番日本人が知りたい男”の素顔に迫るドキュメンタリー。世間では、官房長官時代の「令和おじさん」という愛称や東京新聞記者・望月衣塑子氏との会見でのバトルが有名だが、政治家として彼がこれまでどのようなことを行い、何を考えているのかというの意外に知らない。安倍政権のナンバー2を長く務め、ついにトップの座に就いた菅義偉とはどんな人物なのか？ 彼の姿の向こうに、報道からは決して見えてこないニッポンの真実が浮かび上がってくる。果たして、日本の将来はどうなっていくのか？

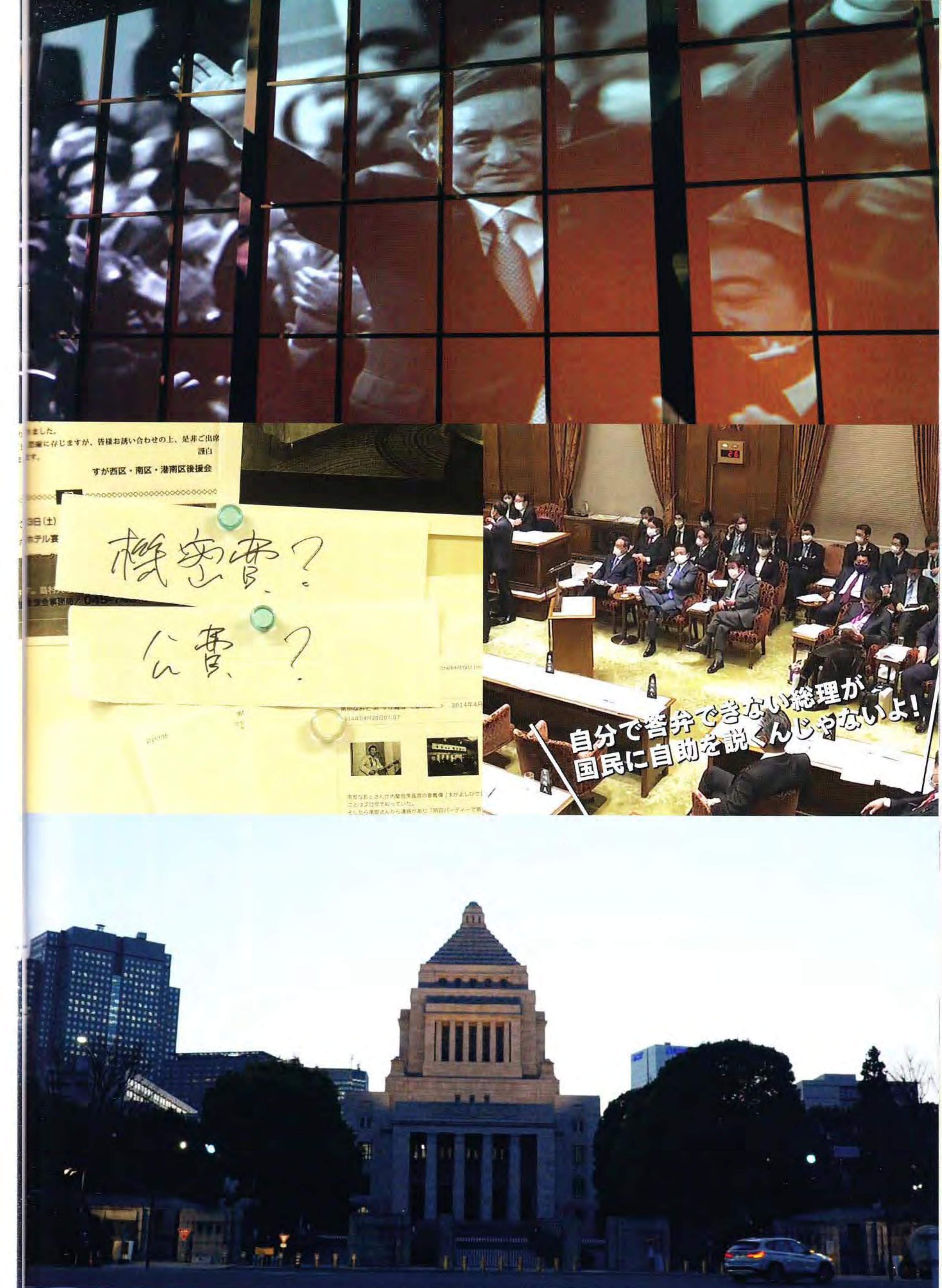
知っているようで知らなかった、その歩みと政治手法

秋田のイチゴ農家の息子に生まれ、上京後、段ボール工場で働いた後に進学。国会議員の秘書を皮切りに、横浜市議会議員、衆議院議員を経て、その気配りと才覚で首相にまで登りつめた菅義偉。国会議員に初当選してわずか2年後の自由民主党総裁選では、絶対不利にあった梶山静六を撃退するという大胆な行動で、政界を驚かせたこともある。安倍政権の官房長官時代は、無表情で公式見解を繰り返す様子から「鉄壁のガースー」とも呼ばれた。派閥に縛られずに様々な人物を起用し、人事権を駆使した官僚掌握術や独自に張り巡らせた情報網でも知られている。信頼する側近たちを重用しながら、メディアをコントロールする影の支配者として君臨していくだけに、いつの間にか日本中が彼の思惑どおりに管理・支配されるのではないかという不安がよぎる。「世襲議員ではない叩き上げ」の首相であることから、“令和の田中角栄”と評されることも…。首相に就任してからは、携帯料金値下げ、ハンコ廃止、デジタル庁の新設など一般受けする政策を行う一方で、学術会議の任命拒否や中小企業改革などを断行。国会で質問を受けても、不誠実な答弁を繰り返すその姿は、政治への関心を国民から奪うための緻密な戦略にさえ見えてくる。果たして、菅首相は何を考えているのか？ もしかしたら我々は、権力を行使したいだけの実体のない男に日本を預けてしまったのではないか――。

シニカルな鋭い視点で“ニッポンの本当の姿”を映します、

かつてない政治バラエティ映画

本作に登場するのは、自由民主党の石破茂や村上誠一郎、立憲民主党の江田憲司、日本共産党の小池晃といった現役の国会議員、経済産業省出身・古賀茂明、元文部科学事務次官・前川喜平ら元官僚、そして、菅首相をよく知るジャーナリストの森功、元朝日新聞記者・鮫島浩といった人たち。それぞれの立場から、菅義偉の人間像や菅政権の目指すもの、日本の現状とその危うい将来を語り尽くす。さらに、菅首相がこれまで国会で行なった答弁も徹底的に検証し、ポーカーフェイスの裏に隠されているものを探っていく。ナレーターには俳優の古館寬治を迎え、証言の合間に、日本の“変なところ”を風刺するブラックなアニメーションを挿入。ユニークな政治バラエティ映画として完成している。就任直後に番記者たちと頬張ったパンケーキのように、ふわふわに膨らんで美味しいように見えて、中身はスカスカ(?)の菅政権を作ったのは、果たして誰なのか？ 有権者である私たちは、このまま黙って指をくわえていてよいのか？ 時代の変わり目に誕生したこの前代未聞のドキュメンタリー映画から目が離せない。





相次ぐ取材NGからスタート

すがよしひで
菅義偉首相についてのドキュメンタリー制作を始動した制作陣が最初に直面したのは、取材申し込みに対する断りの電話の連続だった。菅氏に近い自民党議員たちが結成した「ガネーシャの会」所属の若手議員をはじめ、市議会や県議会の議員たち、マスコミに評論家、さらにはホテルやスイーツ店までが取材拒否。そんな中で最初に登場するのは、菅氏の半生を丹念に追い、ノンフィクション「菅義偉の正体」にまとめたジャーナリストの森功氏。彼によれば菅氏は「庶民的で親しみ易い、気遣いの人」だという。朝日新聞の記者としてかつて自民党宏池会を担当した鯨島浩氏も、菅氏を「秘書出身の気配りの人」と評し、アクアラインの通行料金や携帯料金、ふるさと納税といった“値下げ”政策で人々の心をつかんできたと分析する。「国会パブリックビューイング」代表として、国会審議を可視化する活動を行ってきた法政大学の上西充子教授は、菅氏の不誠実な答弁について、国会質疑の映像を見ながら解説。「こうした答弁を続けることで、国民の政治に対する関心が失われることを狙っているのでは」と懸念する。



「二面性のある政治家」

自由民主党の重鎮である村上誠一郎議員は故・梶山静六の弟子を自認する菅氏の、学問に対するリスクペクトのなさを嘆き、「今までの総理大臣には上に立つものとしての見識があったが、菅さんにはない」と言い切る。同じく自由民主党の石破茂議員は現在の国会を「初めて見る言論空間。議論が噛み合っていない」と憂慮する。立憲民主党の江田憲司議員は、横浜市を選挙区とする菅氏は「都会派で、国民の思いが分かる政治家」と「利権^{さと}に聰く、金集めのうまい旧来の自民党の利権政治家」という二つの顔を併せ持っていると語る。官僚の反対を押し切り、ふるさと納税や13年に起きたアルジェリア人質事件での政府専用機派遣など、大胆な政策を実現してきた菅氏の政治家としての力が垣間見える。



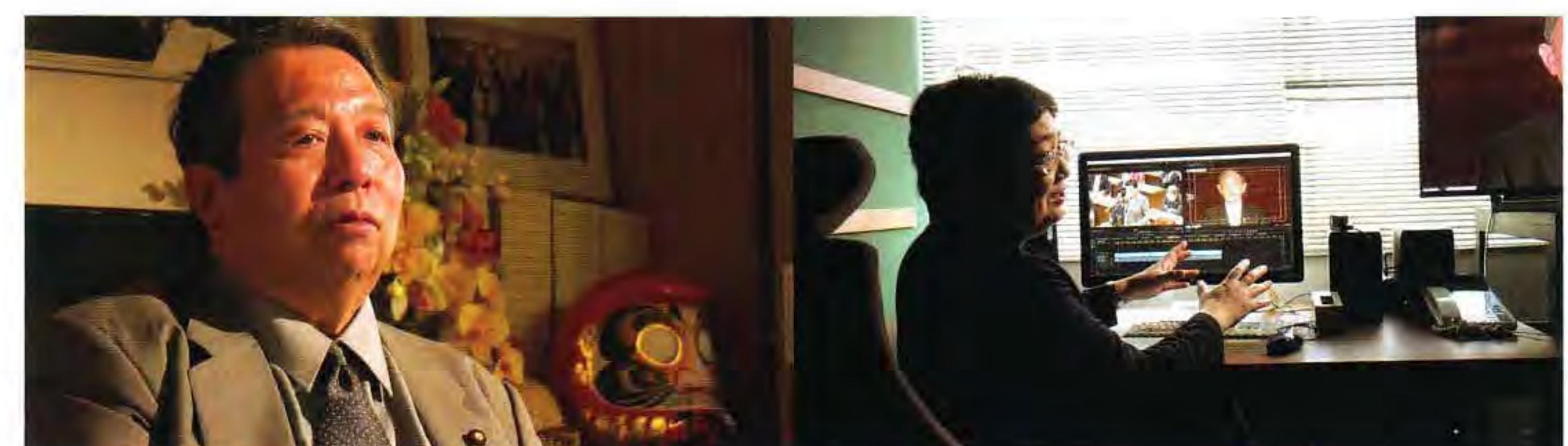
義偉バクチ打ち伝説

菅氏は1948年に秋田県で4人兄弟の長男として生まれた。父・和三郎はイチゴ農家として財をなし、町議会議員も務めた人物だった。法政大学卒業後、元通産大臣の小此木彦三郎の秘書として政治の世界へ。最初の“バクチ”は87年。38歳の時に横浜市議選挙に出馬し、自民党の現職議員を破って初当選を果たす。96年には国会議員となり、98年の自民党総裁選で絶対不利にあった梶山静六を担ぎ出すという大胆さを見せ、周囲を驚かせた。その後、選挙対策副委員長を務めていた09年の総選挙で大惨敗するが、安倍晋三という盟友を得て、20年9月に首相の地位にまで上り詰める。鯨島氏は安倍政権とそれに続く菅政権を、戦後、日本をリードしてきたエリート集団に対する「仕返し政権」だったと指摘。出身母体でトップに立ったことがないという共通点を持つ、内閣官房副長官の杉田和博氏、内閣総理大臣補佐官の和泉洋人氏、警察庁出身で国家安全保障局長の北村滋氏を重用していることにも、その本質が現れている。彼らは“人事”という武器を握り、官僚たちを動かす。



日本の危機が伝わらない—権力を監視するのは誰？

スクープ記事と共産党議員の国会質問の連携で成果を上げてきた、しんぶん赤旗。日曜版編集長である山本豊彦氏は「権力の監視がメディアの役割」と語る。赤旗は菅首相に対しても官房長官時代の官房機密費について追及した。一方、ニュース番組でのコメントをめぐって官房長官時代の菅氏から圧力をかけられた経験を持つ経済産業省出身の古賀茂明氏は、番組降板に至る経緯を回想。また、鯨島氏は、菅氏が就任直後に開催された“パンケーキ懇談会”に対する批判の背景には、政権を監視すべきマスコミの見せてきた“甘さ”へ不信があったのではと指摘する。さらに、近現代史研究家である辻田真佐憲氏は、戦時中、新聞社が揃って「大本営発表」に陥ってしまった歴史を「ジャーナリズムの批判機能が損なわれた結果起きた出来事は、こんなにデタラメになる」という実例として提示する。それは現在進行形の出来事でもある。菅首相の「新たな〈成長の原動力〉を日本が率先して作り上げていく」との言葉を古賀氏はパロディだと語ったように日本の産業が驚くほど衰退していることに「大本営発表」に慣らされた国民は気付いていないのだ。そして、若者と政治の距離を近づけようと活動する学生団体ivoteのメンバーは「投票しても現状は変わらない」という意識が投票率の低さにつながっているのでは、と分析する。こうしたことが私たちに示すものとは——。「政治なんて人ごと」と、過ごしていて、本当にいいのだろうか？





菅 義偉 (すが よしひで)

1948年(昭和23年)12月6日 -

日本の政治家。自由民主党所属の衆議院議員(8期)、内閣総理大臣(第99代)、自由民主党総裁(第26代)。秋田のイチゴ農家に生まれ、高校卒業後上京。板橋区の段ボール製造工場に勤務、2年後に法政大学へ入学。大学卒業後73年、建電設備株式会社(現・株式会社ケーネス)に入社。75年、政治家を志して衆議院議員小此木彦三郎の秘書となる。87年、横浜市会議員選挙に出馬し初当選。その後、横浜市に大きな影響力をもつていた小此木の代役として秘書時代に培った人脈を活かして辣腕を振るい「影の横浜市長」と呼ばれた。横浜市会議員(2期)、総務副大臣(第3次小泉改造内閣)、総務大臣(第7代)、内閣府特命担当大臣(地方分権改革)、郵政民営化担当大臣(第3代)、自由民主党幹事長代行(第2代)、内閣官房長官(第81代・第82代・第83代)、沖縄基地負担軽減担当大臣、拉致問題担当大臣などを歴任した。2019年(平成31年)4月1日に、官房長官として新元号令和を発表したことから、「令和おじさん」の愛称がある。



古賀 茂明 (こが しげあき)

古賀茂明政策ラボ代表。元経済産業省の改革派官僚。産業再生機構執行役員、内閣審議官などを経て2011年退官。独立の立場で政策提言を続ける。2015年まで報道ステーションでコメンテーターを務めた。



前川 喜平 (まえかわ きへい)

現代教育行政研究会代表、元文部科学事務次官。2017年、同省の天下り問題の責任をとって退官。加計学園問題で国会証言、大きな注目を集めた。現在は夜間中学などのボランティアや講演、執筆活動に従事。



上西 充子 (うえにしみつこ)

法政大学キャリアデザイン学部教授。2018年、裁量労働制をめぐる安倍晋三首相の答弁の根拠データに疑義を呈し、答弁撤回に。2018年、同氏のTwitter投稿をきっかけに「ご飯論法」が新語・流行語大賞トップテンに選出。



鯫島 浩

(さめじま ひろし)
元朝日新聞記者。新聞協会賞受賞。政治部デスク、特別報道部デスク歴任。2021年5月に退社し独立。「新しいニュースのかたち」を目指して小さなメディア「SAMEJIMA TIMES」創設。テレビ朝日、AbemaTV、ABCラジオなど出演多数。



森 功

(もり いさお)
新潮社勤務などを経て、フリーランスのノンフィクション作家として活動を開始。2018年、「悪だくみ『加計学園』の悲願を叶えた総理の欺瞞」(文藝春秋)で大宅壮一メモリアル日本ノンフィクション大賞を受賞。



辻田 真佐憲

(つじた まさのり)
評論家、近現代史研究者。政治と文化芸術の関係を主なテーマに著述、調査、評論、レビュー、インタビューなどを幅広く手がける。単著に「大本営発表改竄・隠蔽・捏造の大太平洋戦争」(幻冬舎新書)などがある。



しんぶん赤旗

日本共産党中央委員会が発行する政党機関紙。創刊は1928年。日刊紙と週刊の日曜版があり、読者数は100万人。テレビの番組表やスポーツ、芸能記事もあり、近年はスポーツ記事で評判。写真は日曜版編集長の山本豊彦氏。



杉田 和博 (すぎた かずひろ)

内閣官房副長官兼内閣人事局長。警察官僚として地下鉄サリン事件、在ベルーリ日本大使公邸占拠事件を担当。第二次安倍政権において官房副長官に就任。以来政権中枢で危機管理や官僚人事を掌握。安倍・菅政権を支える。



北村 滋 (きたむら しげる)

21年7月7日まで国家安全保障局長、内閣特別顧問を務める。警察官僚出身。外事情報部長から内閣情報官を歴任する。情報・インテリジェンスのプロフェッショナルと評され、日本の「CIA長官」という異名を持つ。



和泉 洋人 (いづみ ひろと)

内閣総理大臣補佐官(国土強靭化及び復興等の社会資本整備、地方創生、健康・医療に関する成長戦略並びに科学技術イノベーション政策その他特命事項担当)。コロナ禍対応など、汚れ役を厭わない官房長官の代理人。

STAFF



監督:内山 雄人 (うちやま たけと)

1966年8月24日生まれ、千葉県出身。早稲田大卒業後、90年テレビマンユニオンに参加。93年「世界ふしぎ発見！」でディレクターデビュー。情報エンターテインメントやドラマ、ドキュメンタリー等、特番やレギュラー立ち上げの担当が多く、総合演出を多数行う。インタビュー取材、イベント、舞台演出、コンセプトワークも得意とする。主な作品に、2001年12月～日本テレビ「歴史ドラマ・時空警察」Part1～5監督＆総合演出、2006年～09年日本テレビ「未来創造堂」総合演出、2010～15年日本テレビ「心ゆさぶれ！先輩ROCK YOU」総合演出、2015～20年NHKプレミアム アナザーストーリーズ「あさま山莊事件」、「よど号ハイジャック事件」、「マリリン・モンロー」、「ドリフターズの秘密」などがある。



ナレーター:古館 寛治 (ふるたち かんじ)

1968年3月23日生まれ、大阪府出身。ニューヨークで5年間演技を学ぶ。帰国後、舞台を中心に映画やドラマにも多数出演。2016年には「高き彼物」にて演出を手掛け高い評価を得る。主な出演作に映画『淵に立つ』(16/深田晃司監督)、『罪の声』(20/土井裕泰監督)など数々の作品に出演。昨年、滝藤賢一とともに企画から参加し、W主演を務めた「コタキ兄弟と四苦八苦」(20)はギャラクシー賞月間賞、ATP賞テレビグランプリドラマ部門の最優秀賞を受賞した。公開待機作にレオス・カラックス監督作品『Annette』(21)があり、同作品は第74回カンヌ国際映画祭のオープニング作品として上映された。



出演:加藤 忍 (かとう しのぶ)

神奈川県出身。舞台やTVドラマを中心に女優として活躍する一方、2010年の韓流時代劇「トンイ」(トンイ役)や2015年の映画『シンデレラ』(アナ斯塔シア役)吹き替え等、声優としても活躍。第39回紀伊國屋演劇個人賞、2007年文化庁芸術祭演劇部門新人賞を受賞。

音楽:大山 純 (おおやま じゅん / ストレイトナー)

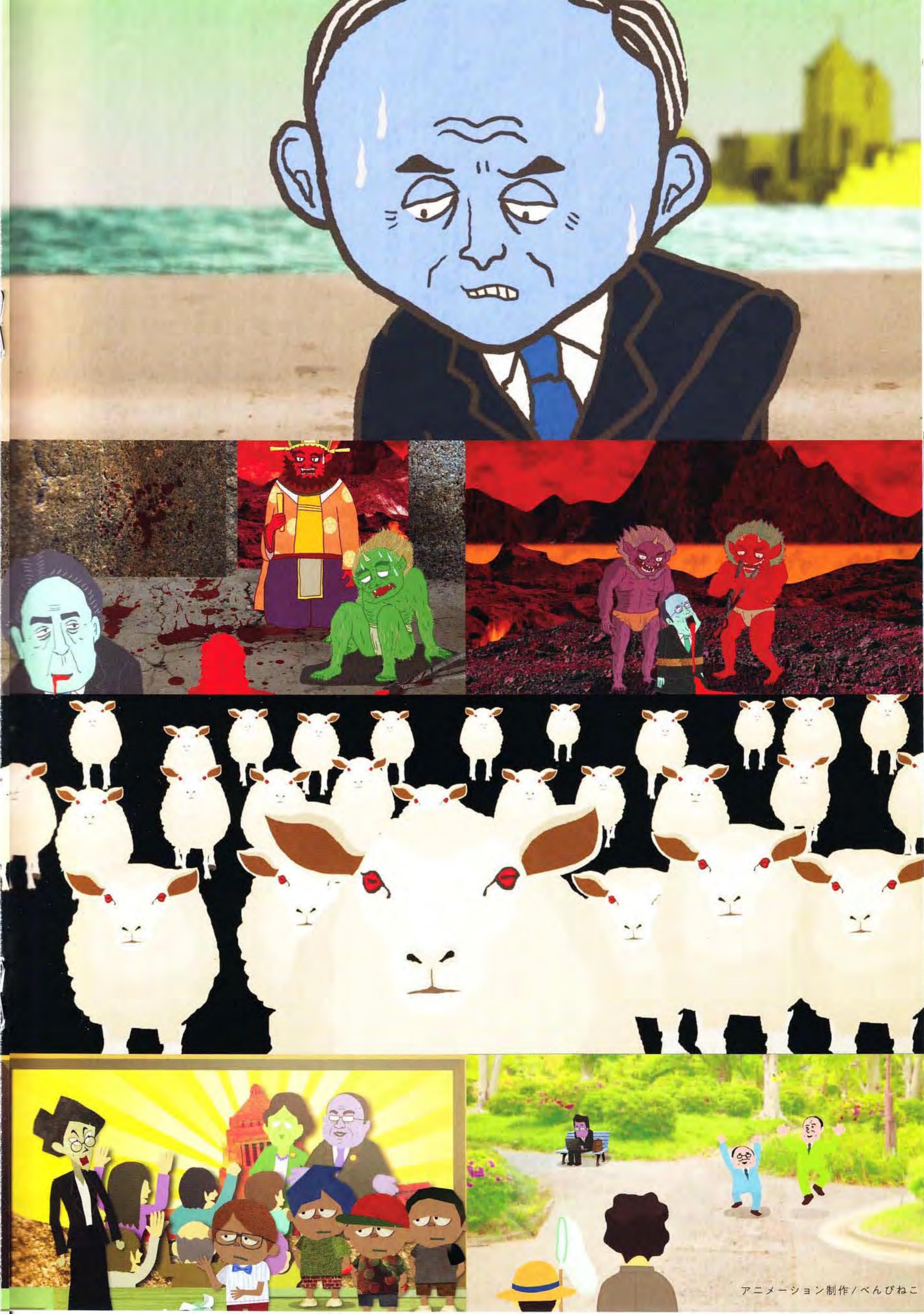
幕張メッセ、日本武道館などのワンマンライブや数々のフェスに出演。大舞台をおおいに沸かせる日本屈指のLIVEバンド、ストレイテナーのギターを担当。彼が奏でる繊細かつ攻撃的な旋律は人々を常に魅了する。

アニメーション:べんびねこ

アニメーション監督、映像ディレクター。キャラクターデザイン、作画、声優などをマルチにこなす。本作では全てのアニメーションを一人で制作した。代表作に「パンパカパンツ」シリーズ、「りさいくるずー」など。

企画・製作・エグゼクティブプロデューサー:河村 光庸 (かわむら みつのぶ)

1949年8月12日生まれ、福井県出身。89年にカワムラオフィス、94年に青山出版社を設立、代表取締役就任。98年、株式会社アーティストハウスを設立し数々のヒット書籍を手掛ける。一方で、映画出資にも参画し始め、後に映画配給会社アーティストフィルムを設立し会長に就任。08年に映画配給会社スターサンズを設立。イ・チュンニョル監督のドキュメンタリー映画『牛の鈴音』(08)、ヤン・イクチュン監督作『息もできない』(08)を買付・配給。製作では『かぞくのくに』(11)、『二重生活』(16)、『あゝ、荒野』(17)、『愛しのアイリーン』(18)、『宮本から君へ』(19)、『MOTHER マザー』(20)、『ヤクザと家族 The Family』(21)と話題作を立て続けに製作、公開する。『新聞記者』(17)は日本アカデミー賞をはじめ、各賞を総なめにした。最新プロデュース作は吉田恵輔監督作『空白』(21)。



アニメーション制作/べんびねこ

『新聞記者』のプロデューサーからのミッション…というかムチャぶりにテレビ出身の監督が挑む

東京新聞社会部の望月衣塑子氏の著書を原案とする『新聞記者』や、望月氏に密着するドキュメンタリー『i-新聞記者ドキュメント』という作品で、異常事態にある日本の今を映画にしてきたスターサンズの河村光庸プロデューサー。そんな彼が、官房長官時代、記者会見で望月氏に対して厳しい態度で接し続けていた菅義偉首相についてのドキュメンタリーの制作を決意したことから、『パンケーキを毒見する』は始動した。

元々、菅政権は最長でも2021年秋には任期満了で総選挙。その前に新型コロナ、五輪でいつ政局になるやもしれず。とにかく7月末には上映しないと賞味期限が切れるかもしれない「菅政権」というテーマ。スタートは11月末。制作期間は半年程。このタイムリミットは、なかなか通常の映画制作スパンではない。日々変化する政界の情勢、内閣支持率の中、「菅首相の正体を明かす」という困難なテーマ、そして期間の制限。そのお題を課せられたのがTVディレクターの内山雄人。「未来創造堂」(日本テレビ系)や「心ゆさぶれ！先輩ROCK YOU」(日本テレビ系)など、多くのバラエティ番組の総合演出を手掛け、また「あさま山荘事件」「よど号ハイジャック事件」のドキュメンタリー取材経験も豊富な内山は、TVのような「短期集中」のチカラとフレキシブルさが問われていると理解した。

また内山自身“オカシな事態や忖度が溢れている…今の政治”と忸怩たる思いがあった。元々、放送局の報道記者でもない制作会社では、自分たちの立場で「今の事件、報道」はなかなか扱えない。今回のような「国のトップがテーマ」に対し、この機会を逃したらもうチャンスはない、という思いと同時に怖さと面白さに武者震いした。「政治のおかしさを“可笑しい”(笑える)形にしてみたい」内山の所属するテレビマンユニオンは50年を越す独立プロダクションの魁

でもあり、「個々が独立したクリエイター」という社だけあって基本的にはクリエイターに仕事の選択の自由を与えられている。そんな中でも「現政権を扱う以上、放送局を介して何らかの影響を社内の各々の現場で受けるかもしれない…」と危惧する社内の意見もあったが、「こういうテーマも自由にやるべきだ」という理解と総意を受け始動した。

「菅さんが撮れるわけでもないのに、何の画を撮ればいいのか？」

ツテやルートもない中で始まった取材は困難の連続だった。飛び込みで連絡をした人はもちろん、紹介を受けて接触した相手からも「取材はNG」と断られることが続く。話をするごとに承諾しても「カメラでは撮らないでくれ」と言われることもあった。コロナ禍が続く中、制作開始後の1月8日からは2度目の緊急事態宣言が発出されてしまったため、取材候補者にもなかなか直接会うことができず、電話やメールでのアプローチを余儀なくされた。また、最初は好意的だったホテルや、パンケーキ店の態度が途中で変わるなど、現役首相に関連する取材を行うことの難しさを痛感したという内山監督は「『あんまり、さわらないでください』という感じですね。思考停止に近いようなオーバーディフェンスな態度を感じました。ただ、これだけ断られるのなら、ネタにしてやれとも思いました」と振り返る。さらにテレビ局のニュース映像も使えないということが判明し、「菅さんが撮れるわけでもないのに、何の画を撮ればいいのか？」と、悩む日々が続いた。

突破口は「国会中継」。そして、国会議員たちの証言

そんな時に内山監督が出会ったのが、「国会を見よう。そして考えよう」と呼びかけながら、街頭で国会審議の映像を見る「国会パブリックビューイング」という活動を行っている、法政

大学の上西充子教授だった。「上西先生に解説してもらいながら、菅首相が登場する国会審議のおもしろい部分をうまく抽出していけば、ドキュメント部分を補完できる」と確信。さらに、菅氏をよく知る自由民主党の村上誠一郎、石破茂、立憲民主党の江田憲司という3人の国会議員から話を聞く中で「菅義偉という人は実務能力がとても高い政治家だ」ということに気づかされ、同じ代議士という立場からしか見えない、

三者三様の「我々の知らない菅首相の顔」は正に「リアル」で今の自民党に漂う空気には、いろんな意味で、怖さを感じた。国会議員3人が揃って「現政権の力はあまりにも強くなりすぎている」と認めつつ、「でも、選挙に勝っているから」と、半ばあきらめたように語るのを聞いた内山監督は、そうした状況を許してしまっている元凶に迫るため、さらなる取材を続けた。

企画当初から元経産省官僚の古賀茂明氏は



様々な取材の協力をしながら、自身が受けた「菅さんによる圧力」を事細かく語った。「影で」「権力や圧力を」というのは菅氏を描く上で大事なキーワードになるのでは…。元文科省官僚の前川喜平氏への圧力も事実だった。「こんな風に黙らされている人たちがいっぱいいる」このような権力の背景や構図を元朝日新聞政治部の鮫島浩氏が解説してくれた。また長年菅氏を追ってきたノンフィクションライターの森功氏が官邸内に蠢くホンネを教えてくれた。歴代の中でもこんなに「チカラ」に固執する官房長官・総理はいただろうか。

「大本営発表」と重なるマスコミの問題

企画当初から『パンケーキを毒見する』というタイトルで進行していた。「菅さん」「パンケーキ」とは就任直後、全く会見を開かないのにパンケーキ記者懇談会だけオフレコで開かれた、という問題。いわば「マスコミと総理との関係性の“おかしさ”の象徴」。多くの人に菅氏のパンケーキ好きだけ伝わっていて、事態の本質は届いていない。「マスコミに何が起きているのか」ということを探るために選んだのが、安倍晋三前首相時代の「桜を見る会」の不正を暴く報道などスクープの続く、しんぶん赤旗の編集部だった。さらに、「大本営発表 改竄・隠蔽・捏造の太平洋戦争」の著者である近現代史研究家の辻田真佐憲氏からは、真実に基づかない報道の象徴とも言える戦時中の「大本営発表」が可能となった背景について話を聞き「官僚、政府、マスコミの関係性がまったく変わっていない。合理的な判断で物事が進んでいかないし、『間違っている』と誰も言わない仕組みが続いている。記録自体もまったく残さない。戦時中と同じことが、今も起きている」と危機感を覚えた。また、若者と政治の距離を近づけようと活動する学生団体ivoteのメンバーたちとも言葉を交わした内山監督は「今、僕ら大人たちが彼らの言葉を真摯に聞かないと本当にまずいと思った。こんな国にしてしまったのは、僕らだから」と強調する。

アニメーションから見えてくる コントのような日本の現実

『パンケーキを毒見する』の最大の特徴は、菅首相に関するインタビューや取材内容の合間に、現在の日本の状況を風刺する5本の短篇アニメーションが挟み込まれていることだろう。内山監督はこうした構成にした意図について「この映画では、インタビューに答えてくださる相手が直接見た、あるいは聞いたことを語ってもらうことを原則としています。ただ、そうした証言だけで構成していくと、『今、こういうことが起きている』ということを俯瞰的に伝えることが難しい。また、今の日本が陥っている“ばかばかしさ”的なものを、笑いの中で表現してみたいとも考えたので、童話のような、物語性のあるアニメーションを作つてみました。これを見ることで『今、こういうことが起きている、あるいは、今後、起きるかもしれない』ということをわかってもらえれば」と語っている。アニメーションを担当したのは「パンパカパンツ」シリーズなどで知られるアニメーション作家のべんぴねこ。かつて同じ会社で働いていたという縁もあり、内山監督の意図が見事に表現された作品が誕生した。

「政治ドキュメンタリー」ではなく 「政治バラエティ」

「『パンケーキを毒見する』は政治ドキュメンタリーではなく政治バラエティ」と語る内山監督。その言葉には、少しでもハードルを下げ、なるべく多くの人に映画を見てほしいという思いがにじむ。アニメーションはもちろん、節目節目で大胆な行動をとってきた菅氏の半生を振り返るパートを「義偉バクチ打ち伝説」と名付けたのもそのためだ。そんな心意気を受け、骨太のナレーションを聞かせてくれるのは、「逃げるは恥だが役に立つ」(TBS系)などのドラマや映画で活躍が続く俳優の古館寛治。日本の現状に対する率直な意見を、漏れ出す“心の声”としてtwitter上で発信していることでも知られる彼の声は、この映画を貫く背骨となっている。



公開記念トークセッション①(21/06/23 神楽座)

(敬称略) 登壇者:内山雄人、河村光庸、古賀茂明

司会:監督の内山雄人さん、そして河村光庸プロデューサー、そして企画協力の古賀茂明さんです！

司会:それでは早速、河村プロデューサーからこの作品をまず作ろうと思った理由をお聞かせ下さい。

河村:もう菅内閣が発足してすぐにこの映画を作ろうと思いました。居ても立ってもいられなかった。『パンケーキを毒見する』というタイトルにもう最初から決めておりました。映画はお金を払って見るものですから表現というのは自由であるべきなんですかけれども、長年の間映画業界にやっぱり忖度というか、自分が『新聞記者』という映画で表現しておりますように、同調圧力というのが未だ蔓延してまして、企画してから監督何人かあたってきましたけれども5人くらい断られまして最後、これはもう長年の知り合いである内山監督に頼むしかないということで、結果、やってもらえることになった次第です。

司会:それはもう幸運でしたね。受け取った内山監督は、実際動き出していかがでした？

監督:こんなにたくさん監督が候補に上がっていたって知らないで今、初めて聞いたんで「マジですか？」って感じなんですけど…(笑)。現実問題、聞いたのは11月半ばぐらいですから、そこからいま考えるともう5月ぐらいにはアップしなきゃいけないっていう本当に限られた時間で、しかもその話がきた段階から菅さんの評判がガタガタしてタイミングでしたから、始めてもいいけどいなくなるかもしれないということとかもりながらの撮影でしたね。

古賀さんが早いうちから一緒にいていただけたんで色々ご相談しながらできたというような感じです。

司会:古賀さんは実は作品の企画段階から関わっていらっしゃるそうですね。

古賀:そうですね。題名が決まるか決まらないかぐらいの時からずっと河村さんと話をし、一番大事だと思ってたのは単に菅批判をすればいいっていうようなそういう映画じゃ全然面白くないなということだったんですね。やっぱり客観的にたくさんの人に見てもらいたいということがありました。河村さんも最初から大きなところでどんどんやろうという話をされてたんです。そうするとこれを本当に面白いものに作らないといけない。出来上がったのを見て、いや本当にこれ難しいことに挑戦したなと思いますけれど面白いものに仕上がった。河村さんと監督に感謝しています。

司会:監督、撮影の過程は映画の最初のほうにもありました

けれど断られましたっていう状況だったんですかやっぱり？

監督:最初に監督に断られていたのと同じように、取材もずっと断られていることが付きまとってる。実際僕らが取材したいということで地元の代議士さんとか市議会議員とか、いわゆるその菅さんの弟子みたいな人たちにあたってみるともうことごとく全部断られました。地元の人たちもあるいは身近な人たちも、途中から撮影場所に使わせて欲しいってお願いしているホテルですらも断ってきて、パンケーキ屋さんに関しては菅さんに食べてもらうのがそんなにメリットがないのか、あるいはそれを伝えたくないのか隠したいのか、もちろんコロナの影響もあるんですが、とにかくパンケーキのあの感じと菅さんはお店側としては、本当に迷惑なことなんじゃないか、と思われるほど、とにかく断られ続ける映画でしたね。



司会:お疲れさまでございました。そういう困難の中でということですけど、本作は多分日本映画史上初めての現役の総理大臣を題材にした画期的な映画となりました。

河村さん、そういう作品を作つてやろうっていうのは『宮本から君へ』の裁判の件もそうですが、映画文化を背負う者として表現の自由を訴えていきたいとかあるんですね？

河村:そうですね。これを話すと長くなるんですが、やはり文化芸術というのは自由でなきゃいけない。現状の社会とかあるいは体制そのものに対してですね。Aという社会に対しては、A'じゃなきゃいけないと、そしてそれがBなりB'なり、CなりC'になっていくというそういう形に対して、常にアンチがあったから、人間の歴史とかあるいは社会発展とか、民主主義が作られてきた経緯がある。文化とか芸術のあり方そのものも常にアンチという形でなければ文化芸術の発展はないんじゃないかなというふうに私は根本的に思っていますので、そういう面で『宮本から君へ』の裁判の判決は意味深いものでした。

(※6月21日勝訴) (会場から大きな拍手)

司会:ありがとうございます。古賀さん、僕この映画を観て例のあのニュース番組の顛末がああいうことだったんだつて初めて分かったんですけども、今のテレビの問題点というカリテラシーについてはどのようにお考えですか？

古賀:河村さんが映画の話をされたんですけど、テレビは映画と全く違つて、特にテレビ報道っていうのが基本的に今日起きたことをいかに伝えるかっていうことなんですよね。それで、伝え方としては面白いのが一番大事みたいなところがありますよね。なので、一番いいのがケンカなんですよ。だから僕があの報道ステーションでやつた時もものすごくマスコミは喜んだわけですね。僕と古館さんがケンカしたという捉え方なんですよ。放送事故っていうことで、ワイドショーや週刊誌は面白おかしく材料を取ろうと、私の家はもちろん、行く先々や、実家の母の所まで追いかけてくるわけですね。だけど実際には、あれは一番最後の段階なわけですよ。要するに僕と菅さんとの闘いのですね。その前もう一年以上ずっと戦ってきて、一番最後これで報道ステーションに出られなくなるっていう日だから、じゃあ何を伝えようかということをやっていたんだけどその前のことっていうのは一切報じられないわけですね。1月にその後藤健二さんがISに捕まつた時の、私の番組での発言でもう菅総理(当時、官房長官)が激怒して総攻撃かけてくるわけですけど、そういうことは僕はちゃんと喋っているんですよ。喋っているけどその段階ではマスコミは何も報じていないから(最後の段階における正しい状況も)報じられないんですよね。よくよく考えてみたらこれは大事なことでしたということはテレビはやれないですね。しかし、ドキュメンタリー映画というのは、むしろそういうところを掘り起こして伝えていく、大事な見落としを全部掘り起こして伝えられるっていうので、やっぱり普通のテレビ報道番組とは違つた意味があるなという風に思いましたね。

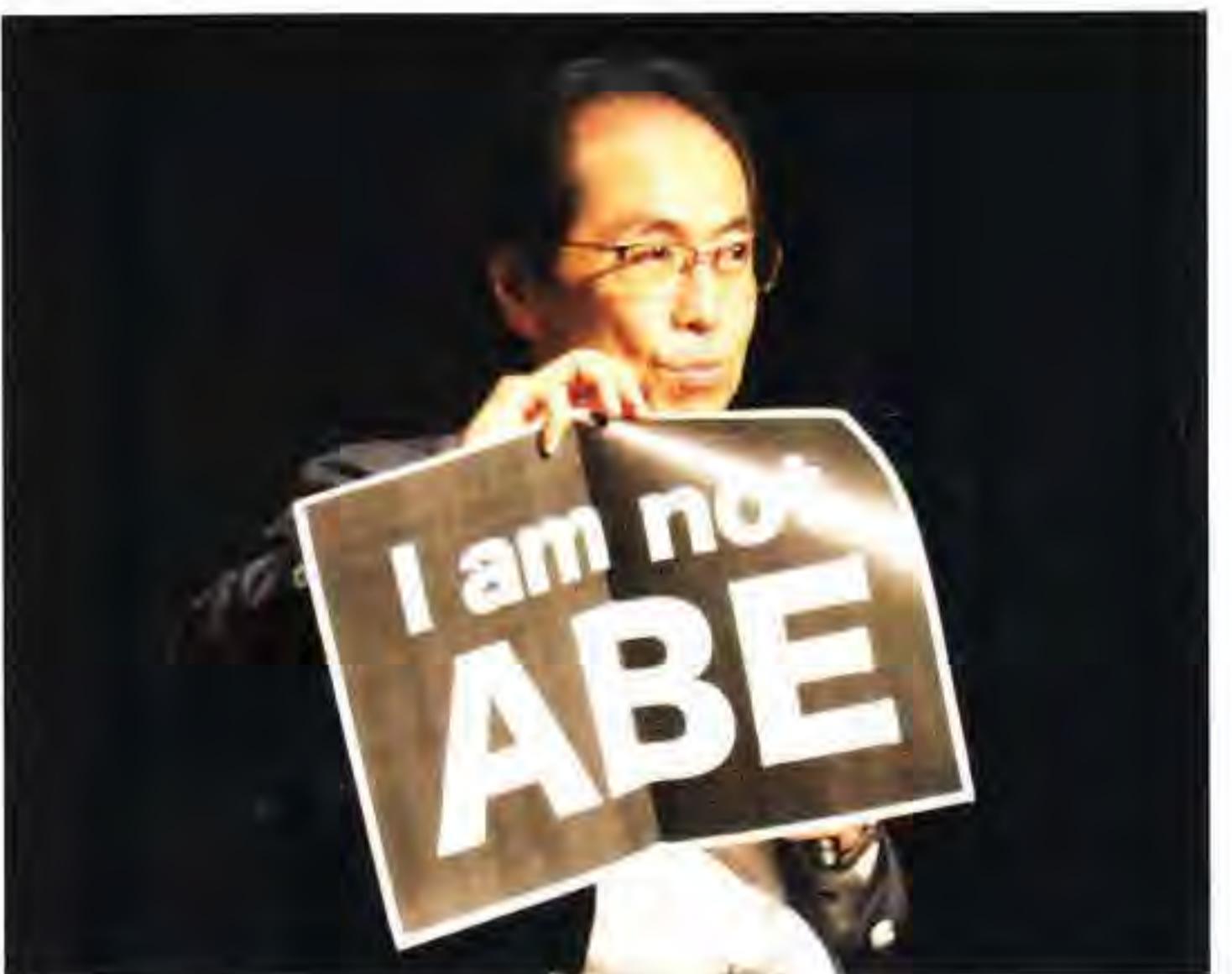
司会:そうですね、僕も『I AM NOT ABE』っていう紙は、困った顔してる古館さんという絵面でしか覚えていないんですけども、あれ実は菅さんなんですね。

古賀:そう。だからそういう意味じゃ『I AM NOT SUGA』っていうのを出せばよかったなど、今になると思ったくらい。あの時、実際戦つたのは菅さんですよね、彼が官房長官会見で私の名前を出さずにいろいろネチネチ言ってそれで終わると番記者が囲んで、懇談もないんですけどオフレコで話すと。そこでも絶対僕の名前出さないんだけど、例えばテレ朝の記者は何を言ったかっていうと「やはりあれって古賀さんのことですね」ってなんとかして古賀って言わせようとするわけですね。だけど、そんなこと言つたら大変な問題になるから、秘書官はそういう圧力のかけ方でないんですけど、菅さんは「俺だったら放送法って言っちゃってたんだけどなー」とかってわざと言ふんですよ。そうすると、それを記者がメモにして、それが社長まで上がってく。で、これは大変だと、菅さんが怒つて

ていうんで、もう絶対出せないぞみたいな話にしていくっていう、菅さんはそういうすごい高等戦術を使うんです。

司会:なるほど、じゃあ今回の映画でその辺がちょっと広まる可能性がありますね。あの紙は今日ありますか？

古賀:持つてますよ、いつだって持つてるんで。あの時以来ずっと入れてて。今度『I AM NOT SUGA』っていうのも考えなきゃ(笑)



司会:監督、このようないろんなハードなというか、いろんな問題意識がありつつ作品は非常にシニカルというかユーモラスというか、アニメなども入っているような形で伝えらっしゃいますよね。その辺の意図というかお考えを…。

監督:やっぱり多くの人に見てほしいっていう時にどうしても政治ドキュメンタリーっていうと観る人が限られてしまうような枠組みがあると思うんですけど、僕は最後に伝えたテーマとして、多くの人に投票に行ってほしいというのがあるんですね。そのためにはもっと若い世代とかまで観てもうことが大事だと思ってるんで、そこにガチガチのドキュメンタリー的なものが並んでたところでどうも届かないんじゃないかなと思って、それで「とにかく笑えるんだよ」、「えつ政治なのに笑えるの」っていう風に伝わってくれると、何とか観てもらうきっかけになるんじゃないかと思っています。あと、もともとモンティ・パイソンが好きだったし古くは滑稽新聞っていうのを書いていた宮武外骨という人が好きなんですけど、そういう人たちが培ってきた風刺したり、社会をいじくるみたいなものが最近無くなってきたので、何とかそういうものを復活させたかったです。だから市民というか庶民の力強さというか、笑いからどんどん力になっていかないかなっていう、あまり声高な強いメッセージを訴えかけるというよりは笑いながらこうイライラしてたり「そうそうそうそう！」と思ってくる気持ちがこう湧き上がってくといいなあっていうのが、それが狙いです。

司会:楽しいお話をありがとうございました。

公開記念トークセッション②(21/06/23 神楽座)

(敬称略) 登壇者:内山雄人、望月衣塑子、河村光庸

司会:本日のゲストということで菅首相の天敵といえばこの方、東京新聞の望月衣塑子さんをお招きしました。映画いかがでしたか、昔を思い出しました?

望月:そうですね、振り返ってこういうこと言ってたなあと。国会答弁の細かい分析を上西先生がしていて、そこまでは記憶に入っていなかったのでああいう解説の大変さもよくわかりました。作品について監督と話してたんですが、昨年の11、12月は菅政権へのメディアのバッシングはすごく強くなつたので支持率も急落していったという流れがありました。だからそのタイミングで監督が取材入ったので大変だったろうなと思います。なのに、ここまでおもしろくしてくれて、お疲れ様でした。映画を観て強く感じたことは、今回は東京新聞というよりはむしろ赤旗でしたよね。やっぱりメディア対権力という意味で言うと記者クラブの記者の中にいる私たちがやっぱりやるべきことがやれてないっていうテーマをもう一回突きつけられたなと思いました。

いわゆるパンケーキ(懇親会)に参加した19社の幹事社中、毎日新聞と東京新聞と最後、朝日がやめて16社が1回目の「パンケーキの毒見」に参加しているんですけど、この参加した各社に内山監督もガンガン「菅さんのいいところを含めてね答えてくれませんかと」お願いしたらしいんですけど軒並み断られて。数少ない承諾してくれたところの記者は「首相との会食を皆さん批判するけどそんなの政治部記者にとっては、当たり前なんですよ!」と大見得きって、まさにその政治部記者の内側の論理を話してくれたりして、監督もこれ面白い画が撮れるとすごい期待してたらしいんですけど、結局、社内で上に上がった所で断られたということです。

観る立場としては、ペンの力で権力を叩くみたいなカッコいいことを言いつつ、実際は全く違う論理で動いてる、その「パンケーキ・メンバー」の内側の論理っていうのを本当は知りたいですし、監督もその本音こそ、この映画で突きつけたかったと思うんですけど。だから、この映画はトータルとして描けてる部分はもちろんですが、描けてない部分にも重要な意味を感じて面白かったです。

監督:そういう意味ではやっぱり組織にいる方が本当に怖がるという感じがしましたね。今回出てきた方みんなやっぱフリーになつたり一人でやってらっしゃる方だけなんですね。

司会:表現されてないところにもそういうドラマがあるっていうのが観ながら望月さんが言ったようにわかるし、そういう面白さがあるってことですよね。

望月:裏話がより面白いです。あとやっぱり上西先生が言つ

ていた、きっと菅さんはみんなにも呆れさせて、もう政治に何かを問うても仕方ないやと、それを狙ってるんじゃないかなというね、たしかにそれが狙いかなとも思いますし、和泉さんとか杉田さんとか鋤々たる面々、私は全然インタビューできないし会ってもくれないような人たちですけど、森(功)さんは会えるわけですよね、映画を見る限り、そういう側近の方たちとの接触の中で、官邸スタッフは誰一人として菅さんを尊敬していない、逆に言うと馬鹿にしてると、なのにそれでもなんやかんや下手すると政権は1年ぐらい続くわけですよね。それは一体何なのかなあっていうのが逆に怖いなあと、映画を観ながら思いました。



司会:ありがとうございます。いろいろすごい勉強になりました。ドキュメンタリーというのは取材の取れ高によって内容や構成をどんどんえていかなければならぬ大変さがありますね。特に去年から今年はコロナ禍もオリンピックもあって急激な状況変化の中の制作期間となつたわけですが、河村プロデューサー、今回厳しい取材・撮影状況の中、監督に期待していた部分などありましたか?

河村:内山監督はテレビマンユニオンという会社に所属してまして、極めて優秀なテレビの作品を作っていましたが、もしかしたら、昨今のコンサバティブなテレビの枠組みに抑圧されながら作ってたんじゃないかなと。だとすれば逆に自由に表現しなければいけない映画を、この短期間に仕上げるパワーを持っていると思いました。

司会:監督、いかがですか?

監督:そうですね。この10年近く、極端にテレビの表現がしにくくなつてきているというのをひしひし感じています。まあお笑い芸人の方も結構そういうことを呟いている方もいらっしゃいますけど、僕ら制作の現場も、ものすごく作る物と企画を出す物の内容が小さくなつてきてるのがよく分かっているので、本作の話を聞いた時、どんな内容になるか分からないし、何が見えるか分からないけれど、映画という自由にできそうな表現の場に、とにかく乗り出してみたいということで、河村プロデューサーの依頼に無茶振りだなあと思いつながらもやってみようと思いました。

司会:ありがとうございます。きっとギリギリまで手直しをし続けた作品だと思いますが、込めた思いみたいなものはありますか?

監督:今回調べれば調べるほどこの政権の闇というか、裏で起きている気持ち悪さをずっと感じているので、なんとか形を変えていくためにやっぱり選挙に行ってもらう、別に選挙で誰に入れるとかではなく、とにかく考えて投票してもらうという仕組みをもうちょっとちゃんと新たに作りあげないとまずいなというふうに思っているので、とにかくその若い人に楽しんでもらうことが一番ですし、なんとか多くに人に届けたいっていうのが一番やりたいことです。

司会:若い人がディスカッションしているシーンと日本の現状がオーバーラップしてくるシーンは印象的でした。

監督:ちょうど実は僕の娘が大学に入ったばかりなんですね。娘はあの彼女たちほど意識は高くなかったんですけど、今後の世の中にどうもんまり楽しい感情を抱いてる感じじゃなかつたんですね。要するに、輝かしい未来が待つてとかすごいチャンスが広がりそうだって感じじゃなくて。そういう彼らの肉声みたいなことを町中の街録で聞いても多分出てこないと思っていたので、やっぱりある程度意識高くてちょっと政治に対する憂いがある子たちに聞いてみると、あんな言葉が出てくるんだって思いました。彼女たちも日頃からどうやつたら人に届くのかって思つてて、彼らの言葉をもっともっと聞いてみたいし、とにかくああいう世代に伝わるようなものにしたいと思っています。

司会:ありがとうございます。望月さんもご覧いただいて、これはどんな人にどんな気持ちで観てもらうのがいいと思われましたか?

望月:そうですね。映画の中で若い人が「批判しているだけの野党だよね」と発言するシーンがあって、それが一番初めに試写を観た時のショックなことでした。「批判するの

は悪い人なのか」と。私たちメディアからすると、権力とか強いものはやっぱり批判の対象だという考え方なんですが、批判していること自体を悪く見ている世代っていうのが出てきている。若い世代の中で6割、7割自民党支持というのがあったりして、青春時代安倍政権しか知りませんでしたという世代にとっては悪魔の民主党みたいなことが刷り込まれているのではないかと。

「パンケーキ好きな菅首相」そういう、ふわっとしたイメージで、菅さんいいじゃんって思った若者たちに、その先々まで考えなければならないことを今回の映画は提示してくれたかなと思います。学術会議の問題は本質的に考えると、とんでもない学問の自由への介入だと思います。

政治に関わりたくない若い子たちにもそういうことがあると知つてもらう大きなきっかけにこの映画がなるんじやないかなと期待しています。

司会:ありがとうございます。映画ができるってありますね。最後に河村さんからメッセージをお願いします。

河村:7月30日というオリンピックのど真ん中の公開ですけれども、この映画をもってですね、9月にたぶんあるであろう総選挙にて、多くの人が影響を受けて、興味を持ってほしい。選挙前だとメディアの人々が“中立”を意識して、発言を非常に控える時期であるけども、まず日本のジャーナリズムの背負っている皆さん、メディアの人たちがこの選挙に対してどの政党を選ぶとか、どの政治家をどうするということではなくて、間違っていることは間違ってるんじゃないかなと、今ある問題に対してきちんとジャーナリストとしての態度として表明するということをしていただきたいという風に思つております。

